

芭蕉翁句解大成

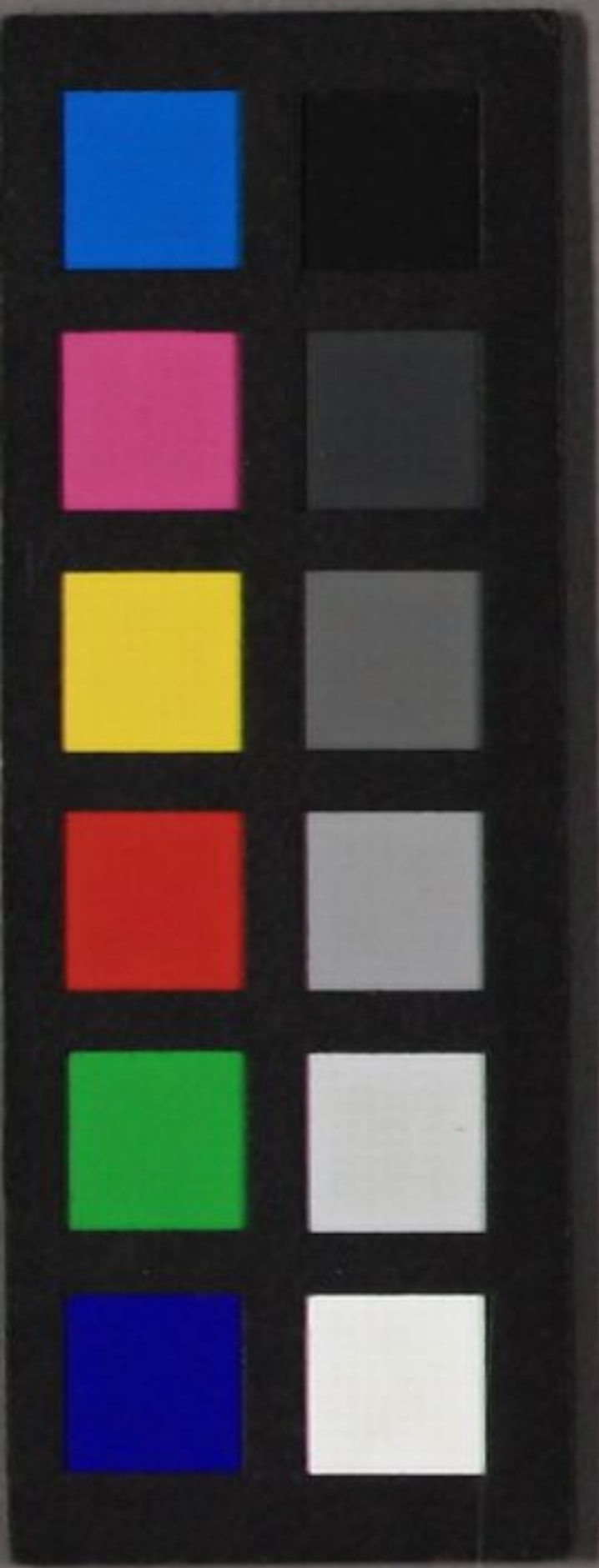
夏

中村俊定文庫

文庫 18

829

2





精校索引

夏之部

更衣 一 二 夏羽織 二七五 石葺草 二 若菜 三
 玉卷芭蕉 五 菰実 五 鯉 五六 八十六
 荷 六 卯花 六七八 菫橘 八 牡丹 八九
 蓮子花 九ヨリ土マテ 八十三 芥子 十一
 郭公 十ヨリ十八マテ 六十三 八十四 八十五 八十七
 麻子 十九 菘 二十 夏山珍 二十一 麦 廿ヨリ廿二
 初熟麦 二十一 夏ノ梅 二十三 夏木 五 廿三 廿四
 青リ 二十四 木下雲 二十四 二十五 麻ノ代刺角 廿六
 蚤 二十六 標 二十七 柚ノ花 二十七 萩ノ花 廿八廿九
 蠅 二十九 鮎 二十九 三十八 七 茄子 三十一 三十二



椀 三十一 老翁 三十一 四十三 八十六 笋 三十一
 竹破日 三十二 梅子 三十二 三十三 百日の 三十四
 夏草 三十四 三十六 夏草 三十五 紫陽花 三十七
 合歡 三十八 栗の花 三十九 蓮 三十九 八十三 八十七
 幟 四十 早乙女 四十二 五月雨 四十二ヨリ四十六マテ
 八十三 八十六 八十七 五月 四十一 四十二 八十七
 入梅晴 四十七 夕立 四十七 八十六 夏雨 四十七 八十六
 夏日 四十七 夏夜 五十五 粽 四十八 栢餅 四十八
 菖蒲 四十八 口十九 五十 菖蒲刀 四十九
 桂代 二十五 早苗 五十ヨリ 五十二マテ 田植 五十三
 五十四 青田 五十 墓 五十四 短夜 五十四
 色貝 五十五 宗子鳥 五十六 氷く子 五十六

水鷄 五十六 蚊 五十七 蚊を火 五十七
 螢 五十七 蟬 五十八 五十九 六十 蛸牛 六十一
 道明寺 六十 竹夫人 六十 簞 六十一 早稲草 六十三
 瓜 瓜の花 六十ヨリ六十二マテ 八十三 涼 六十二
 七十五ヨリ七十八マテ 八十ヨリ八十三マテ 八十八
 夏ノ月 六十四 七十 松蔭茶 六十四 心太 六十五
 風薫 六十五ヨリ六十七マテ 夕魚 六十七 六十八
 夏一字巻 六十八 六十九 夏山 六十八 六十九
 八十五 八十八 夏坐敷 六十九 汗 七十一 八十八
 團扇 七十一 扇 七十一 清水 七十二 泉 七十三
 氷室 七十二 六月 七十二 水月 七十三 七十四
 暑サ 七十四 土用干 七十四 帷子 七十五 卯花 六十三

雲ノ峰	七十八	八十四	八十六	母馬山	七十
湯殿山	七十	七十九	枝陸	八十六	晒
瀧石	八十八	百合	八十八	換線花	八十八
秋近	八十四				
					李
					八十八

夏序二

芭蕉翁句解参考

月院社何九著述

夏之部

杉風生友衣いとまきよくふ

——ておく可なり此を

いて中我よきくぬ急きくく障衣

一書よ妻曙抄よまむ——のいろとりふを釈

——て桃菘菜葉小うくなまきす——の急を
蝶の羽よと云

愚考一本よ杉や赤とするも非く延宝

年中杉凡より源川の菴へ増すたる

白交まき

杉とりふ字め何又杉風と翁の釈しきをせよ
ゆゑのちりきをきくきく又拾遺集よ「唱あは
しきうひ」とも蝶の羽乃うひきをたをそ
とてきく

ひと川脱るうらへ負ぬ更衣

愚考元禄元年奈良の辺よその吟生涯城
旅よきくを所住著の一傳を境界をえつて

ふく給お見の松りしを初ふしや

一書よ物見の松と中山道美濃に熊坂長
乾ら悪名を流せしその人よくきく知一乃の良
見るうらこし

あひの

よるるや笠よ持つ交相お
一本にあらしやとす非く義相よ叶す
卯月の末中葺よゆりて
旗のたうれびも

夏衣いさゝか風吹きりつとさん

思考貞享元年甲子の秋江戸を去りて
~~~~~  
終て浮川の葺よゆりての吟なり  
夜来ても只ひとらまのむらり哉

一書よ云ひとしるふ箱根塔海たるの深山  
幽言をよむに生るる小中く  
句をよ枝のよものよ枝よたあれなあるお

百夜二

らむよたあらいつ葉の安き故也す  
免のそんあるへ

愚考石葺一名イハカシハ石皮石葺石鞆等の  
書かゝりし石葺の文字よく此中の形  
忘りたるをわたり山々け溼地をよむに  
見ゆ矣流玉稲を山よりの吟なりと

日光よ

あつちと青葉を乃日の光

愚考徳古二荒山とつふ大権現と人王甲子代  
称徳天皇神護景雲元年よ出たたり  
下野国一宮に開基と勝道上人之下野  
芳賀郡の人とやく若く界域の川同月

補陀落山より登るに中の方ありて登るも  
阿のまの山脈小止り三七の城跡にあり天  
應元年四月又く此山をまよかたき延  
暦の卯三月大抵言城弁乱し此が山頂に  
いづれに善提よりと漸地下は  
則伽藍城建立して神宮寺とありし後  
空海堂山して日光と改むと云く句文に  
阿ののなり

唐招提寺は鑑真初上の  
御影城跡に水眼の志あり  
させ玉ふ城おむひつる  
若葉して水田に粟掛はま

愚考若葉してと若葉城もといふは  
阿の山をいへて水田城といふは  
沿る初尚と唐の揚州の人く淳于髡  
後亂年十四歳父より没て寺に入り佛像を  
えくお若葉の志あり父その羈絆を  
さす城跡大雲寺の智満小系して沙弥  
となり神龍年中道岸律師に傳へ  
善菩薩戒をうけ景龍年中は実隆寺に  
遊く是は是戒をうく日くおくは求法  
塔つ聖徳太子の記に曰く後二百年して  
吳国人高僧が起すむと云く鑑真曰く  
南嶽乃愚公倭国に生じて佛法を弘

と太子の事我よく知れりとも唐の天宝  
年中日本の僧と回船して出帆す波濤  
ありて日南島に吹舟するは時暑毒眼  
中に入て志あると云い佛舍利三千粒を携  
てある薩戸の神にて就まよありし子  
没楽律師火乃玉城は入て舍利を云て  
か多し日本勝宝六年若山宗大寺に安  
館氏大藏経論より鳥取馬に誤多き城此  
初尚来船よおよびて勅整寸と云い又日本  
て法業庵の物と云い佛を知るとのなりたに  
よき此和尙の年論をうくるよ鼻城もて  
嗅かすち城を建てて見てつら川小川とて

夕夜也

たうふりやうと云い 聖武帝勅額  
天平五年年中大和山に招提寺を造立  
周基壇を和尙なり文政の公年色凡千  
五十年太子八千九十年 福く  
雨の中なるの庵よおふり

七く日

ちきや玉堂くも其城一株二株

後代又よと云いひんむし花

ふ城カ、むしひひひ

若くは其を能潜るやむかの院

一書よ云宗祇のむしと云いて宗祇は  
よふ城ゆりて山奥ハ能潜の言枝く



愚考王茂子耳余信之日給後定其書  
佳之と彼と云是と云自つと里の偽あり  
寸此句を風國の海に集る杖の部に入たる  
いひこころなり

徳念をせすおれむを川 釋

愚考此句は房長を生て下徳をせす  
出りむをと仰ぐは死句なりへー 澤念の  
麻智存子文をよとをたるふれは法句の句  
乃死法は心試身て味もふへー 心松念ハ  
澤念の念松子もおれむをせす房長下  
徳の念をせすなりと句は仰ぐあふま  
又云也松念と仰ぐ生ておれむと仰ぐ

白文又

むより盛りの松葉たうそを百本もよる  
もたた免て生る此の海法をよとよまはし  
松念をせすなりと仰ぐは死句なりへー 心松念ハ  
澤念の念松子もおれむをせす房長下  
徳の念をせすなりと句は仰ぐあふま

又教む休夜の中一山初松念

愚考此句は江戸よりおれむとト一人の方  
んの状は初松葉は振るなりなり他か  
原所の似念はか守ゆるともありとも免の  
心松念は信上とありぬ句の意は西上  
人乃分れ情をせす解りなり一草哉  
経て又六中へまとおれむなり

いよの中山命らあきたるを又今も  
めおし〜〜〜神記魚成くふ〜〜〜  
急をかくい句ゆりあふよめ也

松魚賣いのたふる人を酔す也

句急すの山の松急〜〜〜のたれ

甲加乃山中

山崎のまふかひら〜〜〜

公名云好忠末集〜〜〜か〜〜〜  
まよの事いふは少れ〜〜〜れ若をあひ  
から〜〜〜此方の〜〜〜のおひかし  
た〜〜〜のたを願よ〜〜〜かへたるを  
知あやらき柳のおよひ哉

一合五六

七部大鏡よ〜〜〜

円鏡さ大願和為〜〜〜

あひ〜〜〜先近代

あふ〜〜〜書後の

あ〜〜〜先及より

〜〜〜

説叢大全云海を伴に林意〜〜〜

睦月近代化とかく書あひを林意〜〜〜

おもひふ文をよかきたら〜〜〜近代化を

す〜〜〜四月のおと見ゆ〜〜〜

〜〜〜様〜〜〜

梅を二夕月すしきにいして親愛するも遠  
きものよや偲浩らさしあはらむらこの  
時限をとりしんせおひを連る道なる  
迂化のむほきを以りて梅とてとは  
すらく川よ道なる

愚考むりしけれも先の迂化ハ梅の時限  
様もあしを擬すも抑も動のむほを  
見あはるは様もせむ梅も大類ありは  
知るも時よきく佛の侍と続後撰集  
に道令「あひひき命せとをのぞく  
たのしみきむたはふ成るむらとらふ  
分れく梅のためたきをむひてや花の

台文七

いふたしき成るむらあひし  
お田えさるは海念ふて律宗也寺於七無文  
く瑞應山三早く山宋の佛支経  
ゆく弘安年中 平所家建

晋子、母五七日道吾

和心も母を祀祀すすきありき  
愚考新古今もよ慮義子れは母儀を  
なせらるる清信の跡は「をひま  
るくはあはらむらとらふむら  
秋をあひしむらとらふむらとらふ  
を

駿河の甲斐橋の茶の白し



贈 桃隣新宅自画賛

言かぬ新宅牡丹のふれ窓  
桃隣と大自堂と号し 後子樹翁と号す  
祖翁の古き友とて 伊賀上野の人と  
杜より似せりや 似たり水のかけ  
天和年中の吟く 海のこゝろ我まへて魚  
かゝるや 方なり

念はるる

杜より 我は春白のおもひあり

知是ら吟海歌千代念 春とつふ祖翁久  
しく止るや 四季ありしの白も是れ  
らん 早侍のふゆ 誠をあらはれ 念はるる 乃

言仙も列有せり ち回あしりて 祖翁の  
筆一紙 中にもり川又の文庫をこころに 侍るる。

蜀中

かきつたし かのて 旅のこころ  
一書よ云 伊勢 旅の在 五中 舟の 舟 衣 巻つ  
し 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より  
旅を 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より  
人の 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より

山崎宗鑑を 鋪して 近信殿  
の 宗鑑 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

あけりかき手次お侍むかきつし  
一書よ支那跡三宮入乃宗經いせり涯を怪  
むしして既往きし一近侍殿さう法一逍遙の  
おのろく去来ハ知るものなるしとるの目みせ  
玉いっよおあーかまふもこの巻くしとる宗經  
千光の格を流す城少使ししに勝お  
こころかたも成而無下に宗經のひび又いり  
かきおきしことしりしをいふ未えり春むと  
まひしとまの涙あつと結ふまはりしとる  
一書よ宗經ハその名よ古書とは名と成經し  
てはるまきしれぬよりしはは陽山の天狗  
たけりて海の鳴きおをくおけかの山はれ

おとるも成さるまひり人よあよてせしに  
も乃らふもすく船に角ありて出えかたし  
たる斗よそおし見かたまたる人もある  
とく

おのろくあはれは杜より  
ましお子書は西のふれ笑はしむ

一書よ宗のふき書の名はあはれは時雨のふき  
めつしおのふき種は種はあはれはあはれ  
あはれものあはれはあはれはあはれはあはれ  
あはれあはれはあはれはあはれはあはれは

贈杜より  
ふきまに羽のくはれは

次ノの浦にて

延書ノ新先見ノ書ヲ芥子ノ...

一書ノ云一説由良の病人の筆心の...

寛文五年の作と社説を結ぶ...

愚考法花経を考ふに...

よ此手注よ云楞嚴經を...

時々の正月ハ梅好...

一書ノ云現在に色考...





時をなせしこゝろかきし  
 麦や田中一ふも夏ハ杜云  
 毛ののりあえて浪もなると  
 きんこらふくを  
 あらうしきつねのこ  
 ぼしちりしつねを馬の  
 毛きしつねつねの文り  
 をあらしめしつねも  
 おしんはゆき乃業  
 もあらしめし古義場の  
 名流をゆきかきし  
 事一城をゆきかきし

須藤の文に  
 心まじりし書しあきし  
 枯らしめしつねの文  
 うきつねの文に  
 舟のちりしつねの文  
 着せしめしつねの文  
 枯つしめしつねの文  
 甲子に書しつねの文  
 思ひしつねの文  
 天うしめしつねの文

一浪に松島に西の見えに松とつらみとる

杜らなくもやふる雲霞をこ

詞書よ不卜一周を現る凡無ちとあり袖日記  
よふ寂よと脚石とのるよ書書た一に  
カキ

愚業不卜ハ貞門五哲の内石田未得の門人  
多て琴の風の皆く我を今「はなまきん  
ふたちをれれ香誠とそくかしくるむうの  
人ちよひしきいそまの奇あよとらまおひ  
あをきくわをりけり進修なよ心七ありむ  
あしき破筑ちば乃侍くや  
一勢に松江よまうたかや時る。

白雲十已

にういもくあも撲たあやあめ

古江よ云水光接天白露横江の白横のまよ白  
眼あもも曲——ニツの作いつまよと推教  
強定あに沾徳とりまもの訪はさあに  
カハ成あまの将士とあわもあ句の評を  
とふ沾徳横江の句文よ對しと考る時を白  
景をむし——かへり心をはのまのぬいさあ  
とくくろけたる句の白ひ空一まらに思ひ  
身をまの糸中切の巻り角すももらに山に  
まあ堂原安適杯待飲のまきものとも入来  
てあの上れまも宣しきんさくしてり止ま  
せらるるあも句あつと白を路横たあ奇

文を味ひぬ出賢人のいし 荊口文 芭蕉と  
けりしむ 家にお城兼海の上にあつて  
たりしりふへし 杉葉実集も此句の所は  
浅乃せしるも 樂天のたよ 詩を作りて 門前の  
老僧あよさしむしむしつても 此たつひたさむむ  
茂葉云 後赤穂を賊よ 適有 孤雀 横江東来  
とくしる 句より 一物 一物 潮際 葉の  
僧栖 檣の 詩よ 一汀 巫峡 月 兩峯 子親 天と云  
つるも 双関の 句法より 子親の ありの 兩峯よ  
横たさる 侍も なるまゝ

杜宇すくく 麦に村尾

茂葉云 源氏宮のやよ 尾ふりも

句文ナ

も浅く 一かしてまひくろく あり今  
葉に 其の 葉よ 一さしめ 神かと  
たまつ 山 裾 野に ち 尾ふり  
ありし ちを ちよ ちよ ちよ  
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ  
一汀 せ 一汀 せ 一汀 せ 一汀 せ

一書に 尾の 尾の 尾の 尾の 尾の  
尾の 尾の 尾の 尾の 尾の  
尾の 尾の 尾の 尾の 尾の  
尾の 尾の 尾の 尾の 尾の

堀峨

かきまは 大分 糸 月





子親かきくや黒戸の溪底

愚考黒戸溪之上流に良玉集に「おとら  
下しはまひたまるる」といふ句あり是乃の  
溪乃秋の節は月黒戸の溪の溪底とて  
みづけく白ゆきまひく溪ひきくを  
乃流よかりありて底のく見ゆるは  
乃秋の溪底に「むゆよ」  
とありて「乃く」  
鳥賊「乃く」すきく「乃く」

杜る流りかきくや島をく

一書は「乃く」とありて「乃く」の流りかきく

乃く流りかきくや島をく  
乃く流りかきくや島をく  
乃く流りかきくや島をく  
乃く流りかきくや島をく

天宗の流りかきく

灌佛の日にせしむる不慮多義

愚考中天竺广伽陀国浄飯王の妃摩耶夫人  
の衣の昭腰より降涙す「乃く」四月八日  
春の夏の季の候なり天竺より春は冬三季  
より秋なり一年に三季ありて「乃く」  
あまの流りかきくや島をく「乃く」  
乃く流りかきくや島をく「乃く」

此の袖に書かれてあるものも、  
ふんやん以上と書き、  
杖の心よりかき、  
天竺の心をくめたる、  
古ののりもき、  
太子とやま、  
龍草、  
年、  
あ、  
廉子の佛、  
味、  
の、  
埃、

百夜十九

とよめ、  
素門、

合、  
愚考、

より、  
ハ、  
略、

下、

エ、

一、

傳りしに就てみえぬりす。時の久なり  
五雜俎に四月十五日天下の僧尼就禪刹一  
搭桂謂之結夏又謂之結制又安居云  
釈氏要覽云心形靜寂を安と云要期此  
住を安と云云

名はハ休の内

秋や源ノ河原舟もや旅志も麦是

人し川邊すくおとて  
残りの白をらふて出

麦の穂成ちりりにはおふらるる  
麦乃穂を刈よそ免て時季を徒

一書に古今集に「麦の穂を刈よそ免て時季を徒」の句あり

ふるまひもこれおちる岩のそ秋乃らふ年あは  
よらま一穂したるく

伊豆函館の島に米門

去年の秋とらまはり

いさゝかに我名をばて

そののまらりたるついで

もと尾尾ふまらあを

まらひまらりや

いさゝかに穂麦くまむけり

杉高うま十輪寺四階は馬麦とつ事

あし奥たはり経に佛九十日食馬麦中

我周地誘佛日髡頭沙門正志食馬麦不志



食此甘膳之供是等也下心して句似をひり

まさきやまの穂よおつゝむ

一書よその條のまさきよつゝむは穂に  
よつゝむの歌おもたりよまよよよはまを  
潤したる。昔よ子やうり上層もはーめ  
も好しや枕その涙よ云きよつゝむの  
人のもてよつゝむをまさきよつゝむの  
涙乃ちよつゝむにまさきよつゝむに  
つゝむよまさきよつゝむに店宮一  
ふやつゝむよつゝむに店宮一  
まさきよつゝむに店宮一  
愚考まさきよつゝむに店宮一

句交は

まさきよつゝむの穂よおつゝむは穂に  
よつゝむの歌おもたりよまよよよはまを  
潤したる。昔よ子やうり上層もはーめ  
も好しや枕その涙よ云きよつゝむの  
人のもてよつゝむをまさきよつゝむの  
涙乃ちよつゝむにまさきよつゝむに  
つゝむよまさきよつゝむに店宮一  
ふやつゝむよつゝむに店宮一  
まさきよつゝむに店宮一  
愚考まさきよつゝむに店宮一

或山寺より

薄十様 住持も仕まゝの穂

まさきよつゝむの穂よおつゝむは穂に

一書に「稲よつゝむの穂よおつゝむは穂に  
よつゝむの歌おもたりよまよよよはまを  
潤したる。昔よ子やうり上層もはーめ  
も好しや枕その涙よ云きよつゝむの  
人のもてよつゝむをまさきよつゝむの  
涙乃ちよつゝむにまさきよつゝむに  
つゝむよまさきよつゝむに店宮一  
ふやつゝむよつゝむに店宮一  
まさきよつゝむに店宮一  
愚考まさきよつゝむに店宮一

甲斐の山ありて

江釣の妻にわささむ金りか

胡蝶を刺長ハ、詩に江春不肯留行客

色青く送馬蹄又杜詩、衫裏翠微馬銜

青州一嘶、たそくつ、伊ちるる

少き体、昔在弁台、評林、歌、叢、大、全、の、三、波

さ〜に、さ、不、か、り

一書、王徳太子、馬釣、の、つ、里、大、石、の、所、り、て

あり、尚ほ、西本、歌、る、派、下、方、禰、寺、の、境、内、に

あり、甲斐、國、より、黒、釣、の、名、馬、を、考、へ、

本、釣、の、名、を、経、て、武、保、川

にか、く、る

お、か、ひ、お、り、本、釣、中、四、月、の、換、時

愚、考、古、詩、古、樹、合、風、常、帶、雨、寒、岩、四、月

始、知、春、本、釣、の、冷、天、足、お、の、説、も、似、る、る

さ、り、を、そ、の、白、も、夜、深、き、山、橋、は、換、足、心、を

に、本、釣、つ、つ、る、意、の、う、に、衣、と、ふ、所、た、り

雲、岸、寺、の、妻、は、佛、院、禰、河

乃、山、岳、に、改、め、る、松、の、山、度

一、々、そ、の、山、を、書、つ、け、は、る

本、釣、も、葦、も、や、あ、り、に、ま、本、を

一、書、に、中、山、存、も、下、部、も、那、河、の、里、に、な、り、

禰、寺、の、佛、院、和、上、も、え、本、釣、河、川、を、考、へ

に、信、に、祖、師、の、名、を、禰、の、山、と、も、考、へ、

とせし成るより三日月なり松の炭くハ續  
ねしえさしといせし松の炭にツ井松炭  
炭しえさしかきまきりしを今文の松炭と  
かきまきりしを今文の松炭と  
三水たしと佳境あり所謂十景と玉机峯  
珍巖岩の分石就中洞十林林千丈岸  
竹林塔海山岸園と名雪亭又  
五松と独木松ハ松橋瑞中松橋  
松の松橋之水と松の松橋瑞中松橋  
又松師の号と松の松師の号と建松の  
道隆と松師の号と下さし松師の号と  
一書よ木松師の号と下さし松師の号と

百五十三

大坂と造る天王寺城建をありしを守屋の  
怨念をとりたるをき破りし松師の号と  
松師の号と松師の号と松師の号と  
松師の号と松師の号と松師の号と

幻住庵とて

先たの心松の木もあつたまゆを  
幻住庵とて松師の号と松師の号と

山嵐山松師の号と松師の号と  
松師の号と松師の号と松師の号と  
松師の号と松師の号と松師の号と

岡田氏より

蘇のあまのほよかりそが  
并に云々ははしつて友とてのほよまのあまを  
つたりのそよ海女まかりしめはひたさむ  
の侍を

須戸の浦より

まろりきやふらぬ笛や木下寄

一書に云笛も豊盛のおりしきまをり  
お今もあえて竹あらし先はし脚の以  
きよ入る余れおしきをぬきし一本を  
ゆりよ平氏の人のしりぬ  
愚考六百書を合し笛仲のあはれ

る友世

つくりもれいきふしやせしに海さむと  
せしに海さむし笛乃音を吹ぬ笛よきくと云  
えりてまよ葉の笛の侍る木下寄りあ  
しり

武隈の松見せ中せま松

笑よ白とつふとの候おしり

様よりねる二本を三月あ

一書に武隈の松ハ鼻駕の松もいふ此松今  
岩根の中天井の社乃つちしにりり初漢  
三支園今すよ昔後系元若任国の所録の  
そのに初て扱ふ所の松は松まよ橋  
孝通たけらすねる二本を都人いふと

となくみまゝと云ふ心又此句の前文に往昔  
陸奥守より下りて人此木伐伐て名を川  
橋にせしむればたゞのやかたとおもひ生能周乃  
武隈の松はけしむにゆかきとよみりて  
愚考奉白々武隈の松見せやまはま様の今盛  
こと候ふありたるを様とて松を見よ  
様とて今二月越えたりやうく松をア  
かしく松を二木よるといひ二木よふ  
このいひかけたりて見えしと云ふ心むの  
月越と摸字変態たるはけしむの  
心たるを

世を様とて代かく小田のけり  
白夜古五

一言よ云千載集「さ」に矢たうきうき  
とまのめりといつても旅のあつた  
はがれけをふすたう白たう  
愚考かの木白々天地者万物之逆旅光陰者  
百代之過客たうの心もたう  
麻の角先一ふりたるはけしむ  
一書よ句選よ其の心よ入たるはけしむ  
仲夏のけりや角の生ひ物たるもの  
二候にけりや角の生ひ物たるもの  
右よおと

富太の吟  
山のぬめ又出々茶碗のおちひが

延宝四年の冬、予して白鷺さるるを以て

日隠に、此の形を封人の

赤城を見かけ、て舎を求む

三日、風雨あり、てよなき

山中、よ返る多す

又中、風ある、始、存す、ち、わらふと

愚考、字典聚、土田封、大載、礼五十里、為封、封、ち、知、行、  
能、儀、く、アツウ、スルと、訓、して、封、人、の、カ、ル、と、ハ、カ、  
よ、て、ち、冥、ち、る、谷、こ、を、た、と、の、大、た、ぬ、と、見、る、へ、一、  
見、と、し、主、出、羽、の、難、下、と、し、赤、前、の、冥、と、し、既、  
と、一、書、に、又、え、と、し、む、山、中、雪、多、く、以、て、ま、よ、  
て、ち、牛、形、を、一、既、等、も、う、な、本、家、と、告、す、と、ま、

白鷺は六

よて、敵、て、變、事、と、見、る、屋、か、一、後、よ、る、の、  
赤、城、と、し、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、  
や、一、あ、ま、き、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、  
か、と、し、一、傳、信、と、し、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、  
川、と、し、一、傳、信、と、し、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、  
「か」た、ち、紅、む、と、し、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、  
栗、と、し、一、傳、信、と、し、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、  
あ、ま、き、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、

赤城山、白鷺、に、よ、る、山、路、を

と、む、る、と、し、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、

一書、又、此、古、今、一、む、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、  
ち、つ、つ、つ、た、う、す、白、作、一、傳、信、と、し、か、

愚考莫傳抄に「山を削ぎ乃きしを削る  
や見えとさ雨うはなうふてとくそられめ  
の付たうむら雲見そのあふちの異名よ  
しつよせらありはにありちハ梅檀の文を  
にかつての義たしむをいさこのたういけむ  
又云此る古うはるりしは摸字の義然  
も大專胎撫背すもあはれは中し見よと  
を内心よと見えの句作くとすゆ

袖乃るふよむうをまふ料理の局  
浪化曰西上人「朝ちのまふ梅の香は志め  
むう」哉志のふたうむはしむのさく

百夜七

右のよはは白ハ浪儀の梅舎まての懐回の  
かしくまの去来ハ武門の功をこけて教  
室平人の名を祿ヤークの浪用をい  
かゝる屋一あはよの字の梅を袖のむら  
を文書の二根あはる今時西常の徳をおも  
と室にさるを也いハ梅の科を料理の  
ちとりよち強大名の舎款かす昔の業  
を志のうむと例の梅をさる  
梅若草云ふとつよは雨ありか  
あはゆるさるさるさるさるさるさる  
ふ心くさるさる  
愚考小かす梅橋と云大かすを袖と

漢書江陵千楨樹寺千戸侯等すし  
可知侯万戸心寺方とらりて甚く用も尚雪  
るもこの心実人に去る武門のいしつを  
思ふよまたうを思ふ科理の向のるのな一字  
眼の一書に科理がと出せしと心の人く

許六の本名路よおむむく

にわくふ

旅人のありるも似上根のふ  
胡蝶曰今按は是倒お衣の句は此句ハ許六  
本名路よおむむく時の候あこ心ハ根のふの  
さしたるるを吾もたかく淋ま風情よまらふ  
旅をもせし川よ必にをなすさよなうひ

て花英をそはをかりすとくしる教戒の句と  
るるへへ介にふ細かき根のふの心も似と  
りよへきとを倒お衣の法を以てかくしるものく  
許六韻塞の句をもて解のれをのりつるものく  
大全に韻塞を条を引つる元禄六仲夏五月六日  
の許六の候あはれ文章あり略えしう詞よ本名  
路をて経て四里に帰る人に本林川氏許六の云  
たしとくしる根よ情ある人をも後に及哉  
かけそも轉よ足をつり免破望にまおまをい  
とみておの心をせめてもれく西を志すを  
候るも仕官あはれやけのるよいも涙を腰よ  
たさしそかけの後よ論をもたせ歩けり意



のまき羽おのねよむかへたるあまきふ  
此人の本意はあつたか

根の心乃千のちも似よ本意の意

うきの人乃根も亦一本を根塊

胡蝶三句一白は決定すきよ

も今滅後の形見よニツた

名ありおつる梧桐といふ

も此をを思ひたつむと真中

かけくいさなむいやすい

よ人し梧桐の木かけに

序をさうつけををあげて

又たらむも其の川の流る

一書よ新の歌集よ又たらむかうはの秋は

ひうアとも西本のかおる長月の歌又玉葉集

又たらむあつた山のふもと寺社の名にのり

の月がとも又きとむいあつたといひかけ又た

むたつたつたをを今集かとも木

けつひかけ成たとも先

愚考稀葉のかけといふは梧桐は山

なつたつたあつたつたつたつたつたつたつた

半つたつたつたつたつたつたつたつたつた

も周君くは平の文おいたつたつたつたつた

に此歌英法といふつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつたつたつたつた

又ふ加ら川体中に同名あるを名寄集「河心  
人のよちひもさきまを長月のたすの川の川に粟の  
下りちの長良川を名濃より新の名おく

岐阜より

面白うてやそのかまき粉、みか

七歌大鏡より

幸の事

先づつしや山をいてたものおか子

浪化曰西行上人「たさひなきおひいてを乃  
さうつうのねいんる川あめのむ乃おかひを此  
方の事らひなきとつよをめつししとちあ  
様はあかあると特してうけぬはあかあるは

つらにおもひよせてきりすの法達をほろ  
たるものやあはいてをを思ひ出のやとつ  
つら心くホ白のいてをを出増たるとつら心く

出増たるとつら心く

菅もさうのまを茶まのうけあか汁

橋平ふたなき茶のせす

天和二年の依虚粟の細く甚る角より或人の  
もとく交通に粟門をヨステヒトとよませ  
粟角はヨステサケとくむくアききよの  
越よひを山をヨステ候とくふく似せぬと  
るむく

二やや山テサあふを城

愚考古字に「」之比凡の宿之免るるは此竹  
よすしこふしちりぬる喜さるる竹中よく是れ  
奪胎換骨の白法と異竹よる喜さるる竹中よ  
きをさるるくと由目さるる換たるる竹中よけし

竹中よるや種まきまきの繪のすすまひ

愚考事文類聚曰稚子脱錦綉駢頭香玉滑  
竹譜曰呼筆為稚子云々多よ筆よ稚子の  
かけ合我スヘ

小智目屋一きよて

一きよふしや筆とさる人のたさ

愚考小智局も人王八十代言舎院の古てる  
梅所中油言成範の女之大井川よハ水

白夜三十一

一書よ古今集よ「いすあ」尺なふおもひり  
竹乃るのうきふしきけきせしてきりんや  
たしもの付をさるるたるる句

本因之

ふしと母竹種る日と表と云

一書よ曰五雜俎竹譜云竹類六十余一種と  
云し我竹を竹雨る便移須留宿土記取南  
枝此妙訣也俗説云五月十三日為竹醉日不特  
此也正月一日二月二日三月三日至十二月十二日  
皆可栽大要掘土欲廣不傷其根又砍枝積  
使風不控雨後移之土濕易活を不成者而  
暑月尤宜蓋土膏潤而雨澤多也

一書よる仇池墨記日種竹浪用辰日我竹用  
臘月五月十三日古人謂之竹醉日又謂之竹  
送日又盛茂或陰雨則鞭行明年笋蒸土又  
出焉

杜子美詩東林竹影薄臘月更須栽山名  
詩竹須辰日斨笋者上番成以竹之月  
の良をいづるやいとめつとるく物も  
此句も竹の画賛之竹醉日ハ一句の意向なり  
まふと有聲の画とも云ふ凡流の

砕てく味もたろくこぼる石の上  
愚考代醉編云慈和縣武口塞石上有花如堆  
心牡丹枝葉繚繞雖精於画者莫能及或

以物擊之彼其花拂拭之其花復見云くは侍を  
摸寫多態せし之石の上とあるはてし知ぬへ  
砕てく味もたろくこぼる石の上とあるはてし知ぬへ  
せたるもくはこぼる石の上とあるはてし知ぬへ  
のりてかく名也一玉ふるは流は凡人のさ  
たろくおれんか

正成之像鉄肝石心此人之情

たろくこぼる石の上とあるはてし知ぬへ  
愚考正成の墓も拵長久田郡を庫川  
五丁坂本村勝道寺より水戸茨門光国  
々の改造より碑文も明人葬水の櫻  
系書之拵河泉三州守贈正三位近侍

中將と云ふ二代楠三代の至忠希代の名士

那漢の思羽と出るやに

か、アアと云ふ新をのこり

なげたせぬのこるをゆる

ちひさまの二人二人の既

志とてた一人一人と

小姫とて各々がさきと云

きつたはぬ各のやと

りしはた

かきとては八争押子の名取へ

かきゆとては八争押子の名取へ

みよふたりあつむと推したるや

百日月のすつ四五日をるる

流梅をなまなまきもれを

りしをいりるを停て

もろき人またとくむさもなむ

浪化公曰「世に中をいよたとくむさ

はまゆとては乃あまのきつたはぬ各のやと

やと云ふ

愚考を致し七文をのま入して句意は

流るる浪をなまなまきもれを

あつむとては乃あまのきつたはぬ各のやと

たとくむさもなむとては乃あまのきつたはぬ各のやと

そのたとくむさもなむとては乃あまのきつたはぬ各のやと

何れいひ

衣川より泉の城を先と里  
て之を鎧に下りて大河に  
登り入康徳より旧跡を衣  
の里を渡りたる事跡にを  
りしかるを夫をふせり  
見こころをさして義長を  
てけ城より出ても功谷一  
善とたると小石の山河  
お中と城をふりてまを  
た早とまあきて時  
おと涙をおとせぬ

たの川より兵と申すの

一書に云和泉の城より和泉三所より居城より  
康徳より系の衛より次男行達次よりと云  
る源氏より兵衛と云夫をふせり  
夫をふせりたる義長の一旗も  
てて戦死にむ義長より帳を  
もつる杜甫春夜詩より国破山河在  
城春草木深の之入あり

教せ石

石の香のやまの赤く

一書より和漢三才図会より近  
中二夕宮中管絃之夜燭滅時帝  
寵妃玉

藻前<sup>カ</sup>身<sup>リ</sup>放光<sup>ヲ</sup>帝自<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>不豫<sup>ス</sup>安部易謀<sup>シ</sup>山  
之<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>玉藻前<sup>ノ</sup>所為<sup>也</sup>于<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>玉藻化<sup>リ</sup>狐<sup>ニ</sup>逃<sup>ル</sup>東  
國<sup>ニ</sup>因<sup>テ</sup>詔<sup>シ</sup>三浦<sup>ノ</sup>少義<sup>ヲ</sup>明<sup>ク</sup>千葉<sup>ノ</sup>常胤<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>然<sup>レ</sup>權<sup>ヲ</sup>廣<sup>ク</sup>  
常<sup>ニ</sup>驅<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>狐<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>下野<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>那須<sup>ノ</sup>野<sup>ニ</sup>義明<sup>ヲ</sup>射<sup>テ</sup>殺<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>爾  
後<sup>ニ</sup>百<sup>ニ</sup>年<sup>ノ</sup>餘<sup>ヲ</sup>狐<sup>ノ</sup>為<sup>リ</sup>石<sup>ニ</sup>世<sup>ノ</sup>俗<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>殺<sup>ス</sup>生<sup>レ</sup>石<sup>ニ</sup>觸<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>石<sup>則</sup>  
鳥獸<sup>ノ</sup>人<sup>民</sup>皆<sup>テ</sup>死<sup>ス</sup>時<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>僧<sup>大</sup>微<sup>者</sup>欲<sup>テ</sup>止<sup>ム</sup>石<sup>ノ</sup>怪<sup>而</sup>不  
能<sup>マ</sup>焉<sup>後</sup>深<sup>草</sup>帝<sup>室</sup>治<sup>年</sup>中<sup>詔</sup>僧<sup>源</sup>公<sup>羽</sup>即<sup>源</sup>前  
到<sup>リ</sup>石<sup>傍</sup>題<sup>偈</sup>舉<sup>拄</sup>杖<sup>卓</sup>一<sup>下</sup>石<sup>忽</sup>破<sup>碎</sup>其<sup>夜</sup>一  
女<sup>子</sup>現<sup>謝</sup>禮<sup>曰</sup>嫗<sup>得</sup>淨<sup>戒</sup>生<sup>天</sup>言<sup>訖</sup>詔<sup>沼</sup>矣<sup>矣</sup>  
愚<sup>業</sup>深<sup>源</sup>公<sup>羽</sup>付<sup>云</sup>前<sup>時</sup>于<sup>野</sup>名<sup>下</sup>破<sup>空</sup>龜<sup>墮</sup>  
機<sup>縁</sup>を<sup>拈</sup>シ<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>汝<sup>既</sup>是<sup>石</sup>灵<sup>師</sup>也<sup>未</sup>性<sup>向</sup>何<sup>處</sup>  
收<sup>ト</sup>ム<sup>ク</sup>則<sup>偈</sup>ヲ<sup>題</sup>シ<sup>テ</sup>云<sup>法</sup>ノ<sup>塵</sup>ノ<sup>端</sup>的<sup>石</sup>

白文之十六

本<sup>未</sup>面<sup>目</sup>未<sup>曾</sup>藏<sup>現</sup>成<sup>ノ</sup>案<sup>大</sup>靴<sup>車</sup>矣<sup>孰</sup>中  
行<sup>任</sup>度<sup>量</sup>則<sup>杖</sup>杖<sup>を</sup>上<sup>テ</sup>卓<sup>一</sup>下<sup>寸</sup>石<sup>忽</sup>心  
破<sup>碎</sup>ハ<sup>ク</sup>教<sup>斤</sup>ノ<sup>破</sup>云<sup>石</sup>工<sup>ノ</sup>殺<sup>金</sup>を<sup>源</sup>公<sup>羽</sup>  
と<sup>ツ</sup>子<sup>也</sup>母<sup>有</sup>之<sup>と</sup>子<sup>也</sup>和<sup>尚</sup>也<sup>越</sup>前<sup>人</sup>弘<sup>安</sup>  
三<sup>年</sup>寂<sup>滅</sup>也<sup>云</sup>云<sup>云</sup>書<sup>如</sup>何<sup>此</sup>狐<sup>之</sup>也<sup>云</sup>  
妖<sup>怪</sup>を<sup>云</sup>云<sup>天</sup>竺<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>遊<sup>是</sup>五<sup>ノ</sup>妃<sup>花</sup>湯<sup>ノ</sup>  
夫<sup>人</sup>ノ<sup>王</sup>ノ<sup>子</sup>ノ<sup>死</sup>テ<sup>千</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>死</sup>を<sup>斬</sup>ク<sup>云</sup>  
中<sup>夏</sup>段<sup>封</sup>王<sup>死</sup>ル<sup>ル</sup>也<sup>姐</sup>已<sup>化</sup>シ<sup>テ</sup>九<sup>尾</sup>の<sup>狐</sup>  
と<sup>云</sup>云<sup>云</sup>好<sup>テ</sup>天<sup>ノ</sup>ノ<sup>上</sup>云<sup>云</sup>又<sup>年</sup>代<sup>記</sup>云<sup>云</sup>  
後<sup>小</sup>和<sup>治</sup>帝<sup>ノ</sup>ノ<sup>應</sup>永<sup>十</sup>一<sup>年</sup>あ<sup>ら</sup>た<sup>り</sup>地<sup>獄</sup>  
境<sup>出</sup>ル<sup>是</sup>也<sup>云</sup>云<sup>須</sup>の<sup>温</sup>泉<sup>ノ</sup>の<sup>事</sup>よ<sup>ク</sup>云<sup>云</sup>  
所<sup>ち</sup>云<sup>云</sup>云<sup>云</sup>

下井を那須の黒羽と云ふ  
所の樞密卿一何かしのすま  
りしを尋ずひてふのきせを  
ふ入布と云ふしおのさたる  
まふありけり

秣負りし人を粟米百石せり

一書に西の上人「子」に於て其書あるを考へり  
乃ち其の考へしを「見ぬ」の心をたつて其の  
意を「おつ」の句と云ふ

愚考ありて「おつ」も「おつ」の「お」と「つ」と  
眼を伴ふに似たりと云ふと思ふよし「おつ」

白文三十三

とりよまたよりの作らも「おつ」の上「おつ」  
と「おつ」の由縁を「風土記」に云ふ玉の押の君  
に依りて「おつ」の作らと云ふ二つの押系ありしその押  
たつたに「おつ」の作らと云ふ「おつ」とは「おつ」又依りて  
中川とて「おつ」あり玉の二つの川の石よつて「おつ」  
秘するに「おつ」の次は「おつ」とも「おつ」は「おつ」  
ま「おつ」を「おつ」せし「おつ」は「おつ」の押の中を「おつ」  
る「おつ」を「おつ」せし「おつ」は「おつ」の押の中を「おつ」  
上「おつ」の「おつ」は「おつ」の押の中を「おつ」  
又「おつ」の「おつ」は「おつ」の押の中を「おつ」  
く「おつ」の上「おつ」は「おつ」の押の中を「おつ」  
し「おつ」の「おつ」は「おつ」の押の中を「おつ」



かきつらふちり又歳よまほそつかけとつふちり

紫陽花をやかしたる時のはる海交

あちさ井や菘を小庭の夜交交

一書よ白楽天陽秋等りちりめてはふりふ

孫名花けしとそいもそ名とまてまのまし

とまていふ紫陽花金とまてして情子まら

以もは海交よかまらまをて七交あ成交

すまるとふ又四平のふとつふむひし四ねある

あまこしそ

松島もわらわらわらわらわらわら

も恨むむむむむむむむむむむ

悲しくも成くまてくまて地交

魂をたやまらふ似て

多の河やるに西施の合教みえ

一書曰聯珠詩格題西湖詩東坡水光滄澗晴

更好山色際隴雨亦奇若把西湖比西子淡粧濃

沫西相宜此絶句をふまてて野鴻を細屋の

よ比して成りたる句なると中然たり但

西子ハ西施也と云夏詩格ノ註又見たり

詩をいふも唯十七字のよ似たりと云せて

切きまらしたるか之淡粧濃法と云ふ

すて一書もそまら成りたるも後漢の伝

のちれの名をまらしむるも西子の詞を

雨朦朧とてゆる海のかかる園中よ暮依

一して雨もさるるなり也とやせし雨屋の時、又さるる  
新舟をよこしかりけりたす此酒衣の侍文のき入る  
合致も後地よあやうきありてくまよて多よと  
ちして美人乃形容洗粧洗沫を撰りし  
出れ妙はけり花よあやうきを此四字の撰りな  
るあつてのしりていよものにおくくし情をいひ  
允意のおよふありあはれ古く舞踏の吟る  
とつともあはれよあやうきありていよ  
愚考いよむいよむいよむ西縁の平作の形容  
をよあはれいよむ此女もを胸よあはれ癖を  
是らういよむいよむいよむ西縁の吳名を蒔  
子千子破氏千旅蒔施先施越女袖

白友三十八

柿 拙子 設子 游子 眉斧 施施 越国  
口天以上の書くありていよむ越王の侍女  
よいよむ後吳王よ選り故よ越国と書すいよ  
吳のそよを割て口天と書て吳名いよむ後よ  
花 轟くたういよむいよむ五湖よぬくとす  
栗門可伸の書栗の木の  
下は葺きをむけあり  
かゝれかひや月たもふを新の栗  
栗みまよて  
世は人の見つけぬむや新の栗  
一たけのちい書よ栗といよむ又さあは西よ木と  
書て西方よれとありていよむ基書花屋一生枝

まし柱ましか木を国むまふとあり栗の字  
西のホーよりあつたリッノ音く西ノ木ちんい  
サイとりるきをいうくそんまき

丹野亭

蓮花香に月をかよそひや面の花  
丹野に能役者なるまるとよて西の鼻ハ

白芥子とぬめて糖の化粧のま  
旧本よをぬむぐ蝶の形足う船く出せま  
全めてあやまりぬ一書一書受一はマ考

佐藤花目う四徳ら飯塚の  
甲子龍舟くまてるはり

丸山とらふよまたつひあまきふ  
林下に大もの路きと人のき  
ゆらにまのせて洞をにおど  
まののこまのたをまここの  
石碑を乃まの中よま二人の  
染るまのまあまのま  
女かまのまのまのまの  
まのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまの  
遠たるまのまのまの  
幾経乃石カ弁まのまの  
こく宛てしおとす

心乃ちたのち五月よかさ新紙職

一書よ依者たのち五月よかさ新紙職の事信史歌を  
依一信史歌を依者たのち五月よかさ新紙職の事  
高よりて及信史歌の父と二人の家も次信  
たのち二人の妻甲胃を先たる本係ありたる  
甲胃堂とていふなり初漢三才書今日寺なり  
竹二本ありて竹の葉をとりて等し一付て云々  
所おの二本の竹の葉をとりて等し一付て云々  
又晋書羊祜傳云祜樂山水每風景必  
造岷山置酒言新終日不倦祜死後襄陽  
百姓於祜平生遊憩之慶建碑立廟歲時  
享祀聖其碑者莫不流涕杜預因名為墜

淚碑白のまら五月朔日の度かたのまら  
かさ山とて顔書纂要云武人以端午于用  
武之度為穿揚之技盡為鬪勇之戲藤本林社  
縁起云天應年中異國蒙古責未被祈申當  
社五月五日大風吹而翻波浪蒙古悉滅却畢  
以此由縁毎年五月五日祭礼神幸時在地之  
神人鎧甲胃帶弓箭自介以降小男兒帶作太  
刀等ヲ以菖蒲入飾之稱菖蒲大刀按る久菖蒲  
勝負の事をもとるなり又按スルニ此日鍾馗ト  
云者ノ貌ヲ幟ニ画テコレヲ建ルハ黃帝蚩尤ヲ殺  
テ後ニ其形ヲ旗ニ画ラコレヲ民間ニ建テ以テ邪氣ヲ  
防カレムコレヲ蚩尤旗ト云ト古書ニ見タリ蚩尤旗

ト鍾馗ト音近キニ依テコレヲ誤ルカ勿論世人ノ云  
鍾馗ハ唐ノ玄宗ノ臣ニテ帝ノ夢ニ来リ疫鬼ヲ食  
シテ人ヲ難逸使ニ載ルノ事ニテ正史ニ見エス故ニ古人  
コレヲ論シテクニカナラズトス

箱根の笈載

目よかゝる時やけさき五月不二

一書ハ伊勢物語ニ山をアノ山を皐月  
の嶺ハ雪いと白く山を阿志山ト云ふ事  
乃箱根いつてさかたこまき山に雪のふり  
一書ハ不二山ト云ふ事阿志山を阿志山ト云ふ事  
感ありてや五月のふりてきてそこ  
ともつたやうにやうに遠く入たる社

まきとに結さしたるはれ

五月雨ははれお遠や月のこは  
さき山は阿志山に雪のふり  
五月のふり山阿志山の嶺ハ雪のふり  
四月のふり山阿志山の嶺ハ雪のふり  
五月のふり山阿志山の嶺ハ雪のふり  
五月のふり山阿志山の嶺ハ雪のふり  
五月のふり山阿志山の嶺ハ雪のふり  
五月のふり山阿志山の嶺ハ雪のふり  
五月のふり山阿志山の嶺ハ雪のふり  
五月のふり山阿志山の嶺ハ雪のふり

あまのり中符の塚をいつこ  
みやとたつ子作りをたより  
一里まやちのうらまはし  
りよまにありしときしゆ  
ふさつきたるあまのり  
わさしきくあまのり

まのりのあまのり  
まのりのあまのり

日乃のあまのり  
ち部大鏡又ま

まのりのあまのり  
まのりのあまのり

五月雨丹かしくぬり

一書よ甚く用云は橋の名大方名あし通んて  
矢をきの橋とくちくきや長橋の天よひる  
勢田一橋に限くくくくくくくくくくくくく  
はよりやく付るままのり湖乃のあまのり  
あまのりくくくくくくくくくくくくくくく  
てあまのり接すとあまのり八景を七ヤ一  
くくく一橋をえ付たる時とらふ所とらふ  
よゆまのり景おのあまのり場をいり付る及ふ  
へまのりあまのりたくくくくくくくくくく  
湖津云あまのりくくくくくくくくくくくく  
和田のあまのり大に乃あまのりひくくくくく

けふの世に大にを散田くうううたる奪胎換骨  
此は世の中

五月雨や蚕の吐く糸乃何

十論の無抄は故箱の糸白も階石も  
古詩古交をま入たる巻くは阿まこと  
手詩をまうり又そ歌をまうり何をまうり  
いふハ一句もまうり一あめり乃後者達も  
世界の人のまうりぬるをうりてま集を人ま  
ら心むら心のつりてまあまの  
乃まの流は白氏文集をまうりてま  
病聖とていひ酒のおもり

雪のやけ糸子散るを

五月雨や蚕

かく此二句を飯中付りて  
てまの余情もいひて  
流をまうりぬるを  
とまのまのまの  
たまのまのまの  
そまのまのまの  
あまのまのまの  
たちめのまのまの

流はまのまの

五月雨に雪の流果を見よ

愚考頼政「子」を「お」も「ゆ」の「は」茶の「ゆ」に  
本「て」捨「く」す「水」や「あ」か「く」も「せ」ぬ「此」の「水」  
か「く」も「や」ぬ「く」も「よ」て「み」月「雨」の「や」も  
く「の」水「あ」け「子」は「お」も「思」を「思」む「と」  
情「を」い「つ」く「す」水「形」る「至」誠「あ」る「こ」

大井川を「出」て「浮」田の「取」塚「を」

氏「の」も「と」く「る」海「を」

又「月」雨「の」吹「お」せ「大井川」

愚考「千載」集「よ」り「み」る「水」を「山」の「大」牧「に」  
も「く」吹「お」ろ「各」こ「そ」あ「り」此「け」山「城」  
の「大」牧「川」を「東」海「道」に「奪」船「し」て「も」み「ち」を「争」  
「い」換「骨」せ「し」

る「及」に「た」

古「の」心「を」「し」信「し」候「も」是「も」又「奪」船「換」骨  
乃「は」く

高「松」舎「ま」

五「月」雨「や」水「流」急「き」た「る」石「の」所

愚考「芳」我「の中」唐「か」水「を」小「舎」の「山」の「お」も「し」  
い「ま」よ「て」定「か」水「の」面「カ」け「を」し「ふ」  
芭「蕉」白「蓮」に「洒」落「堂」類「彼」と「書」し「て」出「せ」  
る「も」水「之」又「も」急「流」を「け」た「る」と「す」る「も」非「く」  
存「も」あ「る」人「の」ま「り」ま「せ」あ「る」を「た」も「あ」る「む」  
ま「た」ぬ「の」急「流」を「し」つ「さ」く「急」ま「た」る「あ」る  
山「上」川「も」み「ち」の「く」も「ま」  
出「て」山「形」を「水」上「と」く「る」む



てやふきちとつふおそふま  
新ふる板敷山の氷を流して  
早もつ沼田の浦に入れた山  
お布ひ着るの中はみをおす  
是よ箱つみぢるをやいふ  
とつふちとつふとつふの  
ま掣乃ひまよふとつふ仙人  
堂岸よのそとつふとつふ

五月るをあつてアアア上川

一書よ宮上大石田に在り出るやうくも皆山  
路より中を宮上川流りやまあるた山

おちい蔵の中よおをあらはとありて  
●おちい川乃ちれを下るいなるのいなまは  
あつて月の月を又白糸の湖も仙還お具  
と古はとのるよ尺くくく仙人書もつて  
存を祀るもつて蔵行平おを亡けの後身  
きなる仙術をたててせんと色ま  
いもつたあつたのこつたを行回してお人乃  
尺くくありと尺馬の口宮よ仙術  
愚考善好法海宮上川をやくそまをその  
乃ちれを下る五月雨のつたのまを  
此白も大石田をみ一葉まよつて仙あり  
巻及あり

並て耳をくわたりたる二巻  
并此の経事をも三時の條を  
解し光巻ハ三代の條を納  
めたるは佛を安置する七宝  
ちりまをせて珠の籠は破れ  
今も柱におもむよくらへ既  
頽廢す虚の蓋とあるべきを  
四面ありたるに困る覺をお  
ちりて見るは志乃く夢時千  
歳の紀をくわたりたる

五月のふりまを解して光巻

一書と光巻をも金色巻をいふ三巻三代は清衡

基衡未乃衡之通氏一統志よ云清衡之その條を  
運筆に傳せて吳城よりはあつた眼の中へ玉を  
入る是玉眼のそくくく

愚考運筆より後鳥羽院の以正朝の佛師と  
す先は一系は法橋定朝といふ佛工の始祖より其世  
の條より一を名工とす子湛又各工の再考  
三代は清衡基衡秀衡の三子をも未乃衡の子は子  
孫戸を所三男伊達次郎三男和泉三男をいふ  
三子とも孫院觀音勢至と寺を久茂とす

ふるも音や耳もきうたる梅もあつる  
愚考方言よ口の破くたるかよと云やあつるといふ  
をくわたりたるの條もなるは耳も破うたるは



てくるくの家賃くもさけてまじせたりをいれ  
たてゝゝゝやの板のたたひにけたりも月九日の  
葉取あやとすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
同一板にゆゑつやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
かえてすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
云葉かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
乃出の人のおもつやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
むのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おぢいゝゝゝ 流能ぞあゝゝ 枕あゝゝゝゝゝ  
いゝゝゝゝゝゝゝ 枝たゝゝゝ 葉と書ゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝ におゝゝゝゝゝ 野名の四季あゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝ 乃あゝゝゝゝゝ ありゝゝゝゝ  
おゝゝゝゝゝゝゝ 乃あゝゝゝゝゝ 枝あゝゝゝゝ  
於ゝゝゝゝゝゝゝ 枝あゝゝゝゝゝ 乃月九日葉  
よゝゝゝゝゝゝゝ 乃あゝゝゝゝゝ 枝あゝゝゝゝ  
もゝゝゝゝゝゝゝ 乃あゝゝゝゝゝ 枝あゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 乃あゝゝゝゝゝ 枝あゝゝゝゝ  
つゝゝゝゝゝゝゝ 乃あゝゝゝゝゝ 枝あゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝ 乃あゝゝゝゝゝ 枝あゝゝゝゝ  
れゝゝゝゝゝゝゝ 乃あゝゝゝゝゝ 枝あゝゝゝゝ

朝のまよひ——越の板赤綴さへるる古依日記  
まらたなまよひれか——とありむう——いふるまよひ  
た——のまよひ

海うらぎの葛蒲の紅鏡の紅

依士よいさかたの山て青白日

吉忌求るて我らうらむらむら

死をんてすて

ふあや先ひひとあつた——求るる

愚考夫木葉よ——ふく——あやめをかし

たさよのあつたあつたにまよひるまよひる

延宝貞享乃石代の何去年もあつて老少

不定のまよひ我を——むらむらあつた

仙臺よ画工志右朱——とて志

松島山陰電気——とて画

書て送つて——海舟の海舟

た——その鞋二足——あつた

たつた社風流のまよひ

あつたにまよひ——実をあつた

あや先まよひ——むらむら鞋の紅

愚考和歌用えお——とて志

たつたあつたはか——とて志

けつたを撰り——とて志

まよひむらむら——とて志

まよひむらむら——とて志





法もたつては柳を草野  
乃重よあつて田乃野  
けり少所の歌を戸部某の  
け柳をさす平なをさし  
のさるひはえまをさすの  
不さるやと思ひしをさすけ  
柳をさすよし柳をさすよ  
あつて

田一板いゝてきさきさき柳の柳

一書の新古今「たの」に法も法も柳の柳  
まづ「さ」をたさるまづ「さ」をたさる  
此をたさるまづ「さ」をたさる

田一板

たや田一板いゝてきさきさき柳の柳

旅情く句法柳の柳をさす柳の柳

愚評是くみもの「さ」をたさるまづ「さ」をたさる

あさ中「さ」の文章の「さ」もあさ「さ」

胡蝶云々詩をたさるまづ「さ」をたさる

了く「さ」の法も「さ」をたさる

よ「さ」をたさるまづ「さ」をたさる

終り「さ」は田一板よ休息の時刻をたさる

働力をたさる

古今抄に「さ」は川の流れ「さ」の状よ「さ」

柳が「さ」とあり「さ」は「さ」の「さ」

西行の歌乃「さ」をたさる田植の「さ」



いさむさ

胡蝶は田植人乃一技を急ぎ去りて柳かけをなさ  
と刃心をもとめし海を渡るもおの影は  
乃ゆつ物は害らばらまに自の代の良ふあり  
てむしりてききまう自の白植く

須賀川の羅漢等六部と云々の

ふ川乃実いの、紙つゝやと云ふ

ゆつ流のすゝえや実乃田植く  
一書よ云猿樂能を交りてゆつ流とてゆつ  
との十七の篇ありて狂言に田植とて  
その別より其木のすぢあてておて上代  
ゆつ流に付てゆつ流にけり此みち

白及五十三

おの田植くゆつ流にけり此みち  
志系ゆつ流にけり此みち  
心も命一白のゆつ流にけり此みち  
おのゆつ流のゆつ流にけり此みち  
その事をもたぐりて今日平にきき通曉す  
やゆつ流にけり此みち

一書よ実名の田植くゆつ流にけり此みち  
ゆつ流にけり此みち  
此比色よありやひきおたゆつ流にけり此みち  
ゆつ流にけり此みち

ゆつ流にけり此みち

ゆつ流にけり此みち

あやとりつらき

愚業は未賣に出たる山家の人を安りに酒買て  
馬よつりけり交るやうに足ゆきさしを酒造を  
しつものゆき途中まき唯みやこたる白ちりも  
田植時まいつともあつあつかけく酒買を  
白中りもちりいも葉うやうにぞるたしり  
自然とあつあつ

たしむい出さかひやう下り塔の聲

七部大後よく

みしりねや取の終の身は

愚考取の終の身もね山を過くあつてす  
るつれあやうのつけ合せよき

台文 五十四

又徳政より本由り許入の

又よき

みしりねや取の終の身は

愚考を山江に大上郡そのを海せりと  
ハ何の便り

大はあき

またあき

みしりねや取の終の身は  
かくね本あき

またあき

一書よ世のあき  
尋の或もあき

吾妻のそり暑く浮むとけは彼れとてふ  
出や一丈傾くもあつた一徳のふりに汗を掛  
ひ様、腰をちかけ了体むさすいひつた  
解一白の解糸を纏ひむとむもえを解  
是くもとむかて六余ふあつたすきくそ

いこの目の糸は移つてき、居た

まはあやあつた、ひや、その

若くは眼あはれ、次を続様、の解コを

獨行不とおせ、ろきハカ

長崎屋、土、日、客、半、日の、雨、哉

あつた、は、日、の、果、を、矣

ふ、素、堂、二、冊、た、は、あ、た

むむむむむ

うき糸をさし、か、せ、よ、糸、を

是ハ糸寺、つ、の、つ、と

一書、山、早、に、つ、を、す、け、を、ま、を、ひ、と、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

の、山、の、果、つ、や、と、け、糸、を、ま、を、ひ、と、

う、ま、に、糸、を、ま、を、ひ、と、

一書、古、今、糸、を、ま、を、ひ、と、

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

いふくまゝくうかむさくお乃くまぬ  
乃別あるまを

能ましく眠くく一永を新く子

白川の夏にかくて旅心

さくすりぬ

夏もは宿をぬ新く同くもの

け白葵の細なるもこれゆゑぬ新くたくと

りよとく夏の家も宿をぬ新く心むく

大は協仙亭

け宿もぬ新くまぬ廊の菊

ま川が雲依をさく及送

して修に後居山田氏の

亭に後居して

ぬ新亭と人のいへた依をま

東海及宮とて来名にのせり及て名清をのま

川へ送ふたりの依をぬれま

ちやうとせとて着刃てゆくのむ竹一瓦

幻住をぬく人くく射して

赤やちをぬぬ七ひさきを流老が

豆乃れをぬぬあふまかきるが

豆乃れをぬぬあふまかきるが

松亭云瀉山禪師教言策二曰後送積迷皆因六賊

六道往還三界匍匐早訪明師親近高德安擇身

心去其荆棘の上皆教言策主死無常迷妄顛倒此

示參禪師人ノ模範故古人己事未明不憚勤劬跋渉  
山川尋師訪友以棟耶舟異社感明道修不止肯空  
坐守愚師心自是一この本文ニ非レハ注マテ句をぬ  
き上ニ自己心の迷妄をりふ、流の内ニ思の字より、  
ちりぬく

本有路の旅おもひえて大はこ

こゝより整田の管を又よけ

おろ管田舟乃月よとくを又んぞ

愚考勢田の管もすく、き法に次て、良光ありけを  
妖片山田舟の月を又く、解た管の光と何かけれ  
ぬにうつしを又く、ふおもひ出よせむこ  
よよれ紫をさるるも又ぬふ管、うま

白及五十一

瀬田乃管見

管見やね既強よてお何つ、の耶

愚考おれ白ハ云祢え事吳世とる、佐佐のへの  
徳川の時の吟、は白ち和佐唐よて管見の傑  
おアアて出たるも

お乃の管を未の管ヤソ能のち

愚考源三位頼政「ハヤその管おねとま、は  
まのの管見又ぬまふそちま、はさの奪胎換骨  
白ちり

操をもつて天に甲ふあひさか

天にくらまー人をもつて、いもむるこゝのまよ  
一て操をもつてのこまよと、古瀬の曲高く

ありにらまはしりしやふりや降の亮  
指しつらうにさるるや平比呂

福紫山

権 清もひくやうのせり

胡蝶云近思深し伊川先生曰夫鐘怒而撃之則武  
悲而撃之則衰減意之感而入也是ホの語し意  
して感深し一掃ふ山とて其徳小く

山形に立石寺とて山あり  
是意大沙乃其臺とて山あり  
信田の地とて山上に於て其  
をこちてとて其言やうの山  
を多くて山をたてて佛

園をぬし佳景寂莫少  
してあろす人ぬ

園中平岩より入降の舞

一書山形も宍上郡二里余の城下なり立  
石寺ハ信に山とて林下に山寺村と云  
中妙村立石寺天台より寺外千五百石あり  
是意大沙入定の地坊舎多く寺石さまみ  
ありて後景の地とて大降と名園仁下野都  
賀郡よりしり美和六年入唐同十四年降  
初して仁壽四年 廬山の寺に任す貞觀  
六年正月十四日寢年七十二是意大降と福紫山  
寺事なり山寺村の里民傳て云大沙の主人悪理

ありりる築師とつゝ必又傷の新よありと故り  
大沙ありと是を忍れ性ありと果してま石寺よ  
入定の後叡山と葬所の事おありとゝ氣位共  
ありと流し墓をおたき大沙の跡をまてるとち  
ゆゝと多し思をたるとり思成はさよ八坂内の  
右の山は胎内くつてミツと思あり山岩へゆまハ  
胎子一してやア後のことさすすすゝゝ志鬼一  
右の山の出先へ天物岩とをとおろしき大出處  
をまてたの岩へゆま石面傍へつた出のり  
かゝり唯すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
寂莫を人ありとありとまゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
そ常迅速

か及五十九

やゝゝゝ死ぬけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
古位よ云けり人上候世兼通地裏よしかゝゝ  
名をくと世果ありとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
了字家ゝをたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けあつてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝはひありと用ありとゝゝゝゝゝゝゝゝ  
七部大鏡よとゝゝゝ

押もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
本山ゝ女人形の記よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

不卜母直傳

あつちけつ政平たまへ道明寺

晋瀏明をうへやむ

窓形よりを霖の墓戸 尊

七部大鏡よくだり

河や松波宅中てふまき

虫騒り瓜乃を法了

下よ無法の既色を去く

ふせとやあきくま枝楮西

よらけまきり

瓜能ふまきいのかあるつまねれり

瀏河、無法乃其く尺をくむ無法の既色と

ハあうーまおぬくせしふもおちまに瓜のふ

白文大

と一對のひのやまに栗にていのちをくはてしを

産梧ぬくのまのまに産り

福多う山の松乃下染りて長

途乃愁感おくさむけん

山修や身をやうまをむ瓜をけ

一本に秋芳朝直白のまのまに産り英流を

瓜乃名おありま菜村といふまをまのまに産り

出考

ふく実と一夜の瓜おさのつとが

初住居よ花りて

夕くもおもつてのふふふふ



一書云あやむ月の曇き日も瓜の字乃又教  
新教しあやむと懐く二段の差あやむ  
つらんと河の双実よりてあやむ白法をもあやむ  
一書云双実とハ双園夕鳥と朝鳥也又教よむつ子  
おかげもつらんと炎天よあやむ涼しき  
瓜乃あやむとて

一書云西行の教よ心性不定よりあやむ  
人れとあやむとて「判る事所あやむは生  
いぬゆふの何れつとてあやむあやむあやむ  
とてあやむとてあやむ

子供等とてあやむあやむ瓜剥む  
おあやむによあやむ涼し瓜能つち

柳骨柳行花を涼し初まの東

前二白子あやむコリの文字全体竹を曲た  
と考老と書を柳條乃方自由より  
よとして骨柳と書柳骨柳といふ時ハ  
おやむとてあやむとてあやむとてあやむ  
とてあやむとてあやむとてあやむ  
不使一介行李告干寡君行人の義を  
書やいさの事

之道は對れ

愚考李白祝子詩「揚杯祝願無他語勿  
愚似汝翁云是を待たるる世よく

似し敵を瓜を二つに割たるやうくといふは瓜是人頭也といふ古語にも見ゆ

瓜つとるきつ子らあひききと夕海

愚考西行上人「松うの石岩松のきりの夕海きつ子らあひききとあひゆるう好此古語の奪胎換骨」

人くつといふ瓜の名をあらわす

言出たる中

瓜の皮剥くまうまう蓮 卷 終

ふつと名をいふ決まらおけくして中くつと瓜

いと由り瓜は是ハ京都にてあるなり  
初葉葉たてうや割む輪をやらん

白皮六十二

葉阿口傳まゝ通伝の玉志多うて納涼の葉舞う  
瓜をとりてちりちりホ白きてて白くまきまき  
了りてくまきとたてあはれりてをて茶書

曲礼曰天子割瓜者副之コトハニ酒君者華コトハニ之コトハニ茶

殺書よ云慈コトハニたる瓜ハ二ツは割又横に切葉の

は割れりよを依切ら土用は了ら又割く云く是初

其瓜を煮てて之 曉の山元 郭 公

瓜をくまきくまきく形をく大鏡の葉 村公

の終に浅れくまきと寝て出れ

小侍村とくまきよて

小侍くまき 葉 丁 松 草

愚考高館の意より小僧と年をとりま松茸と天恵  
の丸さよ對す白く此白く細なるもれはさり

瓜取らまつむふのゆうりのね

眉掃を侍よしてるふれ花

一書よすけいゆきとるむむの衣農あまてくる原  
ふやーとりよ刺の種おくとる眉掃をとり  
婦人の化粧の具として大女師小女師なとりよまの  
かちちきよはるあ農あまてのさうなり

ゆくきあつ流の肌あひむみあむ

愚考源氏まつむむの巻よ「おのむをあまて  
うまあむ梅のま枝とちかかーしと酒さるや  
とあひちくくちちめいれあふあふはる香か

人くのまくいささるやまお決の借とおさる  
あひあうまはる用さかへにぬふはむいささる  
たさ

きよ流のちみよあさかむあむ

流流や流流ちり色まきりり

胡蝶よ此白娘と流流や流流ちりなきまの月とつふ  
白く

去本おさ先河新流の存承よ平をめして白此さ  
蘭女らるるま「きよ葉け月よまてあさちりまはし  
と流流白よ似て心を流流の白は葉かたたり  
と一先の葉新野原さ方よあさーふて流流  
ととく葉さ五志井葉よ西行「ふあつみり



キよるべきはあゝみよせし心

清洲と云ふはあゝみよせし心

六月三日羽黒山に於て

大寺と云ふはあゝみよせし心

代金と云ふはあゝみよせし心

昔と云ふはあゝみよせし心

情と云ふはあゝみよせし心

四日と云ふはあゝみよせし心

あゝみよせし心

一書と云ふはあゝみよせし心

宗因と云ふはあゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

あゝみよせし心

丈山の像

風々々々。羽衣の中涼もつらららら

愚考宋玉賦曰林之衰遊蘭臺宮宋玉景差侍  
有風飄然而至王之披襟而當之曰快哉此  
寡人所下也。燕人共之取之。王御之。さうして  
以と。樂一。平。成。共。よ。す。寛仁のあり。は。い。さ。う。と。  
丈山ハ尾君子襟をしくつらけさ。ま。い。の。後。志  
か。う。う。あ。り。羽。衣。を。も。つ。て。そ。の。と。れ。は。こ。ろ。つ。く。さ。ぬ。を  
所。以。丈。山。の。侍。も。ち。部。大。後。の。主。女。

濡力号納涼

さくさくやんやんのかたまりのお拍子

愚考朗詠之風動清勝水面歌是くのはこ

白文六十一

くく屋了見へー

極風く耳

風乃香も南に道一室上月

此句細乃くくは此たるは丹あるは何布ともあ

小倉山寂光さる

松板をほけ免了和風は葉音

愚考定家ハ「月影むかぬその名もさる」ぬ山  
木にさる人於た家松と松とを小倉山之葉  
山荘のおもひけありくと忍るうくく。松板  
を免了和風の葉音も風もさる此の語くとありを  
くくおもひに似たり

夕歌よ見えたるや 夕もくちをひよむ

此の寛文年中の吟

夕歌のふくねの屋架よ紙帽きて

柳葉云海氏夕歌巻よあけらるるよきそくやして  
つる病ゆらむすしをたてまゝにたるとつらき  
いゝゝゝふらゝゝゝかゝゝゝておかゝゝゝきまひかま  
たゝゝゝあゝゝあゝゝたゝゝゝわゝゝゝをえゝゝゝまゝの  
ひゝゝゝゝゝゝゝ夕かゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝあゝゝの侍  
くねの屋架も蜘蛛の糸もくけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
は台を奉ぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
はくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夕夜六十七

愚考屋架の事 東西 園劇 舎後 雪原

閑所 持津 不津 下家 一割 字の志あり所

くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夕かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夕かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

七部 大渡よゝゝゝ

夕かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

此の夏や湖あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世の夏や湖あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

愚考弘法大師の歌よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おれかけのうらたしちやちやおよそちやちや

たけり山中遊ばしりふ下遊ばしき

修験光りまはちまのかりしき

行老堂にあり

夏山より遊ばしりふ下遊ばしき

一書よおふた山伏の山伏寄客の読又短歌讀  
徳の文とて出で山伏乃早くと下遊ばしりふ  
光りまはちまのかりしき  
役か行老とすはて一板書の遊ばしりふ  
則少雨の遊ばしりふ

おれかけのうらたしちやちや

とくとも入りの遊ばしりふ

おれかけのうらたしちやちや

一書よおふた山伏の山伏寄客の読又短歌讀  
徳の文とて出で山伏乃早くと下遊ばしりふ  
光りまはちまのかりしき  
役か行老とすはて一板書の遊ばしりふ  
則少雨の遊ばしりふ

秋鶴亭乃佳景

山も海も動き入るやちやちや

一書よ伊勢物語よそくとくとも入りの遊ばしりふ  
徳の文とて出で山伏乃早くと下遊ばしりふ  
光りまはちまのかりしき  
役か行老とすはて一板書の遊ばしりふ  
則少雨の遊ばしりふ



山々もとすく大那に松を山道秋輪高き山に  
海勿論に祖公祖の白ハ衣候しきもいつも云候つ  
秋ののり候せり衣とてうむハ候し海山とて  
又味ひまさりて軍伊

山や杉子文日能一里塚

井持氏の松

そはまや伽のよこのふ浪の上  
卯月中以頃テ能浦を  
うしらの山もまはりに  
とーく月ハいまの松子

妻の冬然もあをれまのり  
おれ備のまあし秋を  
らぬりきあうれ

月ハお川とるまのりかまは次テの夏  
月アもものたるまのり平頃テの夏

明石の松

増妻和たのまきゆえをまは月

うらみ候ま

馬羽根

まの月胸もはま一飯磯山

馬羽根ハまはらの一ま

悼遠流看法師

その魂をお思へかゝせ法師月  
此白福乃の記もも此寺に想玉山の住職乃  
くつたさへいふも未考お遠流とつた延喜  
二伊豆安房常陸依後信成土佐中流信成  
伊豫之巡流越前安藝之いお式十六ヶ土鑑  
下流降て我後出中用防さくい白を事入  
まきまのちうあまきい  
手をとつてを未種まぬるまの月  
まの月油とて出る赤坂や  
一書は油とて赤坂の乃十丁まてる次  
事をも更さくやさしとて

愚考法師の事おきく一 赤坂乃十丁の次ハ  
まの月の乃今よしもたきりまるとよ赤坂や  
とつたおくつり凡人のおよそあつた本まよ  
「たつたおくつたつたあけそまきまよあつた」  
つた乃月とていふもいふのむす屋つたを  
移して作らぬまを青おを足跡を向は  
雨冷々あつたは指し書無もも奪能換骨  
まもあつたまよのな款とつて只うもあつた  
つたつたつた 叔香五文まを法師よ赤坂  
と出たつた非之某はるまの乃をわりのつた  
おしひまきつた白よつたまよ 眼まよ油とて  
出るとも扱へ入るまの月乃よまきく骨をいふ

赤坂やと治まひるる白く是をうらむかひま主人  
乃御借いとくそ米まき

光明寺行者堂

汗乃者にしろも折る心は去堂  
細乃の初葉の白く及て細乃又下流の白斗  
ゆきと初葉の法ハ前に出せり

盤鉢うしろ命の傳ふ賢良

ふしてあふむ人乃うらうらつき  
愚考盤鉢ハ貞徳の和教の門人く盤鉢教  
了中更のそまけ新々程をく  
市中隠る

不二の風や初よ乃せまは戸みかけ  
延宝年中のびりく

山路のびり

さし解きまきむ乃はるはるありき

岐阜山よて

城あふり古井に清き先河心

愚考岐阜ハ近州豊見郡よて一名徳系山と  
しん度長谷川ハ岐阜中納言赤乃秋江の居  
城カクしと云く

赤坂の温泉の井と相及し  
ハ徳系をうらむまきと赤  
一方は徳系をうらむ

湯村むらさきもあま〜岩清も

結ふ〜書きよき山よ〜く泉が

愚考 伊勢岩清のハ二所の志願ヲ一して石清の  
八幡宮と云部への通ふを願〜もれはハ別部  
をきくあ〜し〜次を一本に給ふと〜あは  
結の書馬を〜

磯 あ〜書きよき山よ〜く泉が

若清の能白ハ程〜に給ふと〜あは  
意あ〜し〜

新・衣は〜

あ〜書きよき山よ〜く泉が

愚考 冊台通〜し〜日本紀曰仁徳

天皇六十二年五月額田大中彦皇子大和国園鶉  
野〜〜秋〜初〜氷室〜十二月位  
四月朔日〜九月〜用ひて〜大皇者  
避〜〜六月朔日を〜〜  
宮〜〜貞徳の御筆〜〜  
〜〜えたる〜〜  
〜〜よ長月〜〜  
つけ〜〜  
〜〜

六月や〜山

一書〜去來傳にあ〜み〜吟〜  
〜六月や〜書き情あ〜

嵐山もさうさうと母やめなほ情ありとのいふは  
——

愚考夫本集「六月」よりなりぬと見えし大やうに  
あや——きき峰は雪のいろくまけけさうと山も峰  
もさうさうなりありし嵐山もおおき中に嵐山と  
見えしありし——の中——雪のよすおくとさきしに  
向上は一路なり

雪は靴たりに勝るや月乃程

愚考「私の吟」は中にも程のありもめらひ  
たる月乃程と雪とけけとありし中しよ雪中の  
靴のあつとさうさうに雪にまさると雪は靴は  
あやうきなり程もさうさう月乃程は是を食

——て整ふ、けぬハ勝ると一白は勝負を見せし  
佛力のすまきを感るる

あや月乃程とあはしと程録

一書よふ本集「六月」や思ふたきけにあり  
そえてうくつと程はさうさうと再集  
は六月はあや月とありしはあや月程と  
有るさうして白のひきまきも——は雪のうき  
かたらしおあや——白はさう程とありしはさ  
あはし程を却て程のたりに心をよせた

あや月乃程とあはしと程録

あはし程の異さう何とかはさうさう  
右洞へ何とてさうさうとさうさうかけ川道達

うけたる曲音

つゝあはれくつや一本能松の香  
拾乃口志免了香るあけさぞ

六月十七日寺堂若命亭

是キ白紙海子入キり家上川

此白紙子らうらも我たり

延宝中の吟  
かけくおく拂子や香走の去甲子

千子の身まのりも紙書来

ナキ人乃小袖も今や去周

千子の身まのりも紙書来

千子の身まのりも紙書来

海書山惟まはて通るりま  
い白紙乃まのりも紙書来

石清の能本坊は平の許く

或在亦とア刀豆一紙送す

り小を千と通る一紙書来

及果は刀豆一日本一のかゝるま

かねくおくおし一りま紙書

中におまむかきまのりも紙書

付しまのりも紙書

紙書むしる紙書の心をもて

紙書むしる紙書の心をもて

紙書むしる紙書の心をもて

むしる紙名ある人の心まをかき紙書

相不盡ハ式類ハ一山寛永十六年辛巳山白元  
六十年の后ナリ

文解生出山形を結

リノを安置

南を併そふに盡しす

愚考出山の釈迦ハ悉達太子年十九

檀特山入凡十一年証道を漸ク成併を

え了せり

トハ義楚六帖曰那護那摩訶慕

南謨 昂本 南芒 南牟 南膜

南麼 南摹 那濛 那無 那蒙

納無 南北 南摩 那摩 南濛

あまの義園一系礼皈礼皈令皈敬皈依南無く  
釈氏佛菩薩の名号を移け皆南无此ニホを結  
すく又南无ハ法佛世尊の名号故変定すの事  
ありと云

半強ニ事

百三才り種トヤ并の下 涼

四作ト不終りに雪乃 涼

つゆりくを細

破ゆ白に目かけ中もつる 涼

けるた一六等破ゆの入りやうんき夕涼とあり

此再案く此白素半とありて和漢の俗語のき

風瀑を候ふす







〜〜代々す〜〜成林寺  
依了華城とて〜〜記さ〜  
坊に〜〜所國梨の露に  
依了之山形龍の〜〜經冊  
よか〜

す〜〜代々の〜〜月のおま〜山  
中〜〜あ〜〜月〜山  
〜〜山を〜〜心〜月〜  
〜〜ありよ〜〜時〜  
の也〜

愚考什物記曰湯殿山と生剱大日在矣蓋空海在  
唐日神傳云方作本邦良有大山々々如才在  
蓋辨見之事故降朝之日遂依懸此峰而親面奉  
降大日也耳春是金浪充満無人取之修念急  
峯者朝八月既聖開闢至九月廿八日而結禱也  
也唐才〜曾良々此時の句一

湯殿山 然ふむすちお洞の形 曾良

〜〜右の〜  
〜〜日〜  
〜〜代の人〜  
里山の神社と有るの毛相を山玉の貢と〜  
〜〜記〜









六月雨に路のほみりかくたれり  
 柳亭云は庄子維路の文をなるとくたれり  
 舎文ハ其の都にむきり  
 蓮はるあや文か得てやる合羽  
 やみの柳は孤下まふまふ葉  
 柳亭云はれれは延宝中の冷く  
 ちりも三河むらゆき喜はかまはぬ  
 松杜云是ハ菴校までの冷くはさき喜とては杜若とては  
 作ハ菴校といひてさき喜といひ杜若といひ  
 三色は出合たてまをりて喜も三河と奥  
 たふたふふ  
 戸はちとりふれり

白書八十二

戸はちとりふれり  
 柳亭云は庄子維路の文をなるとくたれり  
 舎文ハ其の都にむきり  
 蓮はるあや文か得てやる合羽  
 やみの柳は孤下まふまふ葉  
 柳亭云はれれは延宝中の冷く  
 ちりも三河むらゆき喜はかまはぬ  
 松杜云是ハ菴校までの冷くはさき喜とては杜若とては  
 作ハ菴校といひてさき喜といひ杜若といひ  
 三色は出合たてまをりて喜も三河と奥  
 たふたふふ  
 戸はちとりふれり  
 柳亭云は庄子維路の文をなるとくたれり  
 舎文ハ其の都にむきり  
 蓮はるあや文か得てやる合羽  
 やみの柳は孤下まふまふ葉  
 柳亭云はれれは延宝中の冷く  
 ちりも三河むらゆき喜はかまはぬ  
 松杜云是ハ菴校までの冷くはさき喜とては杜若とては  
 作ハ菴校といひてさき喜といひ杜若といひ  
 三色は出合たてまをりて喜も三河と奥  
 たふたふふ  
 戸はちとりふれり

秋ちりきあはれはよも四葉

愚心考、茶湯に弁認と永正寺、道元禪師  
入、唐々々留影の時、茶道め古き、善子、  
侍、  
し、  
於、  
を、  
所、  
禮、  
お、  
四、  
を、  
ひ

白交 八十八

な、  
を、  
橋、  
依、  
け、  
愚、  
古、  
あ、  
新、  
の、  
大、  
又



茶傳へ湯治の対する事あり郭公のな  
うぬ時よとあすうら木の枝よとこ森す  
るいふれ舞ことと長老おのらくそれよそ  
ぞりくい白急解せり郭公の唱ん  
たけれをよと森して居るといふ事  
お必定せりいりるを志くはして救白  
心を号しけるう一時よ運害を尋く  
されを祖翁のゆく性を志くはして  
そを白をゆる居かすとの金言い  
おありうくく丁おこよよとよりあせ  
とつらと非なり月のまを二ヶふあむ  
り茶代末の僻言よとて

那洲川や牙を安かぬ出〜白  
岸阿川を東海に横四川の下流なり末は湖  
多〜入此川をせま入く舟をさ〜くらしの  
多〜至う白〜是を道にゆ〜とつら  
さ〜く飛く此山を〜をゆ〜とて  
悪考の筆も〜も益もるのいひかけすら〜  
とくゆ〜とつら〜も志〜とれもるおちひを  
とい〜と茶葉の謎なり  
退加山峰よりあくる  
茶や老をたの〜さむ茶 白山  
精進日よ跡りおろ〜やをり 鯉

山下や廣葉の落し雨の音  
ありれすくきき菜の鳴 蛙 小  
東陽のや乞食のや草の上  
兼海はけこる日さしや雲の暮  
夕立の跡乃白いや三徳の松  
五月のや東寺の沙弥の髪をしく  
愚考東寺の空海も乞を勅す西寺の  
守敏乞を妬みて龍王に討て返と  
いへとも大昨の行力強くして忽ち雨ふ  
るされえ東寺の僧流皆く盤利の  
髪も乞れて乞力をそすともめく東寺  
の沙弥も乞のうけ合せ必し髪もよれりと乞の

句夜八十六止

饑別

わうぬるやま杵ふる藤大鏡

色車とやまやおと風車

はまゆや三味水の水のうら返り

何れも古畑の夕やうら

栗しんが文を西のふと

書く西のふと何れあふと

乃基葉葉の一は杖も

扱もはあふと母のあふ

うら

世の人乃んけぬや新の栗



愚者石阿弥  
あつり浅眉腰の匂ももろなる

灌仏や皴も念する落敷の香  
美しきまじひのゆりや后さき

あはれの時

ちぢみちぢみ千一風の秋線花

愚者首の匂の後さき、舞の匂の匂  
あつりあつり言号こいあを成し  
落評を待次の匂いよ、同風しりか  
年始状の文ををなしてあつり風  
あつりあつり吉潤を皆かくのこころ

白夜八十八

サけやサけや耳のすうなるえとく

愚者耳の匂なる、ホト付きと入字十九の  
匂く後よ口の匂くなる、あつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつり

口すくはし月あつりの匂く

愚者令あつりあつりあつりあつり

愚者徳を徳黙の愚焼もするも両者の幸  
あつりあつりあつりあつりあつりあつり  
罪と後悔し、あつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつり



